佐賀県知事立候補者の皆様　　**2022 年 11 月 22 日**

脱原発佐賀ネットからの公開質問状の補助資料として、原発の問題について、原発と放射能を考える唐津の会から、次の内容をお伝えいたします。御一読の上で、公開質問状への回答をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

原発と放射能を考える唐津の会
代表　吉田恵子

① 原子力災害避難の問題について

佐賀県原子力防災訓練 2022 年 10 月 29 日を視察いたしました。

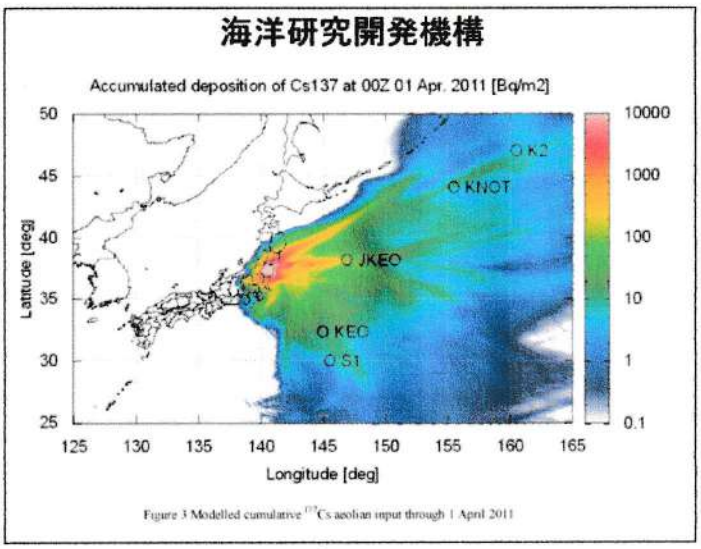
佐賀県福岡県長崎県玄海原子力発電所風向マップ（agora.ex.nii.ac.jp/earthquake/201103-eastjapan/radiation/speedi/35/）によれば、10 月 29 日 9 時の地上の風は、佐世保方面へ、風速毎秒６～１０ｍ（時速約約２２ｋｍ～３６ｋｍ）。唐津市肥前町京泊地区の集合場所では、玄海原発方面から強い風が京泊へ吹いていたが、その風の方向へバスは進み、避難場所は、有明公民館。参加した視察者は「放射性物質とともに避難した。何のための訓練なのか。」と言われました。

上空の風（３０００ｍ）は、佐賀市方面へ、毎秒１０ｍまでの風（時速３６ｋｍ）。

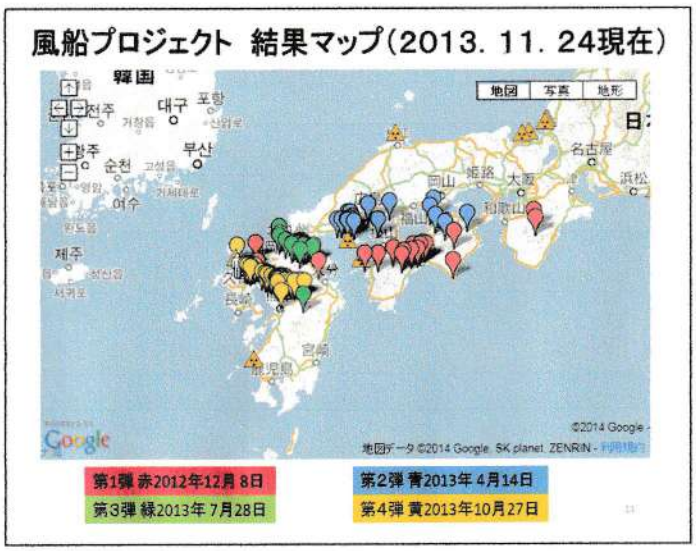
低気圧の上昇気流や水蒸気爆発などで、放射性物質が数千ｍ上空に上がり、雨などで、落ちれば、除染会場の佐賀競馬場外発売所にも放射性物質がふりそそぐ可能性があります。図①と②参照。

避難指示は、空間線量毎時 500 マイクロシーベルト以上で１日以内に避難、20 マイクロシーベルト以上で１週間以内に避難となっていて、放射能を浴びながら避難することになります。

図①



図②



写真①はヨウ素剤配布場所（ボートレース会場駐車場）で係の人が待っていて、バスに乗り込み、ヨウ素剤を配布する訓練

写真②③は除染訓練。人の除染は 4 万 cpm 超過の部位をウェットティッシュで拭く程度、バスはタイヤを拭く程度。

写真⑥春日北小学校での講話は、佐賀大学医学部付属病院の診療放射線技師のかたでした。

「放射線について、少しでも知識を深め、安心いただけたらと思います。原子力発電所の事故発

生時、外部被ばくと、内部被ばく（放射性物質を呼吸で吸い込んだり、傷口からそれが入ったりする場合）がある。外部被ばくも内部被ばくも、線量の数値（シーベルト）が同じなら、人に与える影響はどちらも同じ。局所被ばくと全身被ばくでは考え方が違います。内部被ばくでどのくらい被ばくしたかを知るためには、専門の機械が必要です。佐賀医大病院で、建屋を作り、そこに専門の機械を入れる計画です。佐賀医大病院では、重症の被ばく患者を受け入れることになっていて、測定器を準備します。放射線を 100 ミリシーベルト以上浴びると、がんになる確率が０．５パーント増えると言われています。がんで死亡する人は 30%で、1000 人中 300 人死亡することになりますが、100 ミリシーベルト放射線を浴びると 1000 人中 5 人増えて 305 人死亡するということです。これは、広島長崎原爆のデータから持ってきたそうです。」等話された。

同じ話は、唐津市で令和４年度第１回地域防災リーダーフォローアップ講座でも話され、「福島原発事故で、福島県民の被ばく実績は最大２５ミリシーベルト。100 ミリシーベルト以下なので福島県民に被ばくによる健康影響は考えられない。」と話されました。

同様の内容は、文部科学省から全国の中学高校に配られている放射線副読本令和 3 年改訂版にも書いてあります。これが、今の政府の被ばくについての判断なのでしょう。

写真１

写真２

写真３

写真４

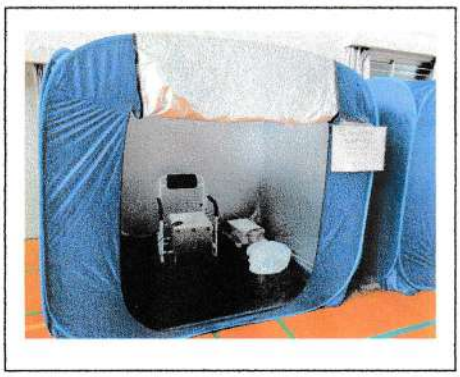
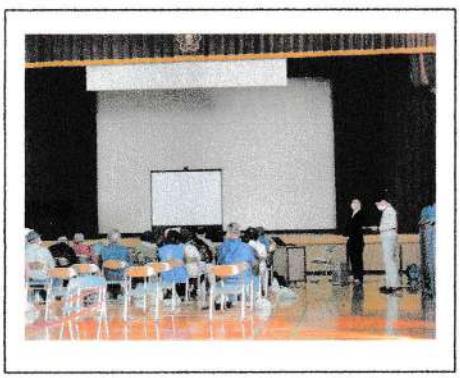


写真５

写真６



問題点

・放射性物質に対して無防備。渋滞で避難が困難な時どうするかについての手立てが不十分。

・安定ヨウ素剤は事前に配布しておくべき。

・全身、車全体が被ばくしている場合がほとんどだと予想されるが、その時の除染をどうするのかの訓練ではなかった。

・放射性物質の拡散は、地上及び上空の風や雨により、数時間で西日本一帯放射能汚染地域になる可能性がある。玄海原発事故避難所は、より広域に求めておくべき。

・講話の、「100 ミリシーベルト以上あびると、がんになる確率が０．５%増える、これは、長崎

広島原爆のデータから持ってきたもの。」ということについて、線量計で測れるのは、主に外部被ばくの場合の、透過力が強いが体に影響が少ないガンマ線（電磁波）です。飛距離が短いアルファ線やベータ線（粒子線）による内部被ばくをはかるには、特別の機械が必要との説明があった。長崎広島原爆被爆者でも政府から内部被ばくによる健康被害が認められぬまま、多くの人々が、がんなどで苦しみ続けてきましたが、広島高裁黒い雨判決で裁判官により、内部被ばくが認められました。なので長崎広島原爆の時の資料からの判断という「100ミリシーベルト以上浴びたら、がんになる確率が０．５％増える。」などとはいえないはずです。

また、100ミリシーベルト以上でがんになる確率が０．５％増えるという政府の判断のままでは、内部ひばくで苦しんでも被ばくによる健康被害と認められず、救済されないし、内部被ばくをさける手立ても十分に行われないことになりかねません。

外部被ばくの場合は、飛距離の短いアルファ線やベータ線は体内には届きません。しかし、内部被ばくの場合は、事情が一変します。飛距離の短いアルファ線やベータ線は身体の中で止まってしまうので、持っている全てのエネルギーで体の設計図であるDNAを損傷し癌や障害の可能性を与えていくのです。

線量（シーベルト）が同じなら、外部被ばくも内部被ばくも健康影響は同じとは言えないと思います。

また、トリチウムは、水素としてＤＮＡの一部になり、ヘリウムに変わることでＤＮＡを損傷するということがあります。（がん治療の今ー市民のためのがん治療の会 www.com-info.org/medical.phpNo.４６５京都大学名誉教授山田幸作著2022年3月15日とNo.４１５北海道がんセンター名誉教授2020年4月14日）

500マイクロシーベルト毎時で１日以内に避難、２０マイクロシーベルト毎時で１週間以内に避難という基準も見直し、内部被ばく（呼吸や飲食で放射性微粒子が体内にとりこまれることによる被ばく）をふせぐ対策をすすめるべきです。

② 玄海原発からのトリチウム流出の問題について

また、玄海原発では、トリチウムを、線量が少ないからといって内部被ばくを軽視し、１リットルあたり60000ベクレル未満は基準内だとして、２００２年から２０１２年までの約10年で８２６兆ベクレル玄海原発から放出し、白血病が増えています（佐賀県人口動態統計を基に森永徹医学博士報告）。

③ 落下物破壊の問題について

「核燃料サイクル施設批判」高木仁三郎著によれば、使用済みウラン燃料１トンにつき１年後で８京９千兆ベクレル。その内セシウム１３７は3700兆ベクレル。玄海原発３号機だけで装荷燃料89トンが約４年で使用済み燃料となります。広島原爆セシウム１３７は89兆ベクレルとされ（2000年国連科学委員会試算、2011年8月26日原子力保安院公表、国立国会図書館ＨＰ）、セシウム１３７は広島原爆の約３７００発分にもなります。

※ 原発を止め、放射性物質の放出を止め、落下物破壊防止対策をすすめてください。